

## 中国国民党と反キリスト教運動

—1925年の孫文のキリスト教的葬式を手掛かりに—

朱 海 燕

### はじめに

1920年代の反キリスト教運動（以下、反基運動と略す）は五四運動以来の全国的な学生運動であり、「五四新文化運動」、「利権回収運動」、「国民革命」などととも「希望の時代」「革命の時代」と称された1920年代を彩る重要なナショナリズム運動である。

これまで筆者はこの運動に注目し、同運動と中国共産党との関係、運動がキリスト教会に与えた影響（教会の「本色化」、ミッションスクール中国化）などを解明してきた<sup>(1)</sup>。しかし、当時広東に根拠地を持つ清末以来革命運動に従事し中華民国成立後初代大総統になった孫文（1866-1925年）の率いる革命党、中国国民党（以下、国民党と略す）とこの運動との関係についてはまだ課題として残されていた。これまで国民党と同運動について論じた代表的な研究としては、台湾の学者葉仁昌が著した『五四以後的反对基督教運動—中国政教關係的解析』（台北：久大文化股份有限公司，1992年）を挙げることができる。葉は、1924年国共合作後一部の国民党員が反基運動に参加した責任を中国共産党とソ連顧問に問うた先輩学者査時傑のやや反共主義に偏った主張を訂正し<sup>(2)</sup>、国

民党も共産党と同じく反帝国主義の革命感情に駆られて運動に参加したけれども、それはあくまで黨員個人の行為であって党全体の立場と政策を代表するものではないとする<sup>(3)</sup>。中国大陸の学者・楊天宏も葉のこの見解を支持している<sup>(4)</sup>。しかし、筆者はこの見方は1925年五・三〇事件以前の国民党の立場を反映するもので、事件以後の国民革命期の国民党の態度には当てはまらないと見ている。なぜなら本論で詳述するように国民党の同運動への関心は同事件を境に一気に高まり、やがて国民党第2回全国代表大会（1926年1月）では党の政策として固まっていからである。

筆者はこのような国民党の反基運動に対する態度の転換点は1925年3月12日の孫文の死だと考える。周知のように、孫文はクリスチャンである<sup>(5)</sup>。彼は14歳（数え歳）のときに長兄を頼ってハワイに渡り、そこでイギリス聖公会がホノルルに設立したIolani Schoolに入学し、3年後次席で同校を卒業する。その後、米キリスト教会衆派教会の経営するOahu Collegeに進学するも、西洋かぶれしたこととキリスト教を信仰するようになったことで郷里に戻される。しかし、郷里でも偶像崇拜に反対する騒ぎを起こしたため父親によって香港に送られ、そこでアメリカ人牧師ハーガー（Rev Hagar, 中国名、喜嘉理）から洗礼をうけてキリスト教徒（1883年冬）になるのである<sup>(6)</sup>。その後、革命活動に参加してしだいに信仰生活とは遠くなったが、彼はクリスチャンであることを否認したことはなかったという。このような彼は、国民党内で反キリスト教の運動が過激化することを防止し、またキリスト教信仰を持っている黨員の慰めとなる存在で、彼の存命中両者は微妙なバランスを守っていた。しかし、このバランスは彼の死とともに崩れていき、孫文のキリスト教的葬式をめぐる党内の論争は、反キリスト教の問題だけでなく国共合作（第1次）をめぐるさらに大きな政治的な問題をも孕んでおり、看過できない出来事である。

そこで、本稿は『晨报』など非国民党系新聞や上海の『民国日報』、『広州民国日報』など国民党系の機関紙や当事者の回想録などを手掛かりに、孫文の反基運動に対する態度と彼の死後行われた「キリスト教的儀式」に焦点をあて、運動における彼の影響を確認するとともに、国民党の運動に対する立場の変遷をたどり、1920年代の反基運動における国民党の役割をあきらかにする。

## I 孫文生前国民党員と反キリスト教運動 (1922年～1925年3月)

1920年代の反基運動は1922年の「非キリスト教」運動<sup>(7)</sup>によって幕を開ける。1922年3月世界キリスト教学生同盟(WSCF)第11回会議の北京・清華学校での開催に反対して運動が勃発すると、蔡元培、李石曾、汪兆銘をはじめとする国民党員は積極的に運動に参加しこれを支持した。

運動では北京の「非宗教大同盟」(新知識人の大連合)と上海の「非キリスト教学生同盟」(中国社会主義青年団)が中心的な存在であった。当時北京大学学長であった蔡元培(1868-1940年)と私立中法大学理事長で北京大学教授の李石曾(1881-1973年)は、3月17日の北京「非宗教大同盟」の宣言に署名しただけでなく、同同盟が4月に開催した講演大会にも参加し講演をした。同同盟の会員名簿からは汪兆銘(1883-1944年)、胡漢民(1879-1936年)、張継(溥泉, 1882-1947年)の名前も確認できる<sup>(8)</sup>。とりわけ、当時第2次広東軍政府の最高顧問兼広東教育会長だった汪兆銘の活躍は際立つもので、南方の反基運動の重鎮だった<sup>(9)</sup>。また、上海の「非キリスト教学生同盟」が刊行した『先駆』第4号『非基督教学生同盟号』には、のちに国民党の理論家として名を馳せる戴季陶(1891-1949年)の「阿們(アーメン)」という白話詩が

収録されていた。そのほか、故朱執信（1885-1920年）が書いた「耶蘇是什麼東西（イエスとは何者か）」という文章は代表的な反キリスト教言論の一つであった。

この「非キリスト教」運動は早くも1922年の6月には終わり、同運動によって引き起こされた知識人たちによる「信教の自由」をめぐる論戦も「科学と人生観」論争へ議論の場を移した。ところが、1924年広東で孫文の率いる国民党と陳独秀を総書記として戴く中国共産党（以下、共産党と略す）の合作が成立し、広東で反帝国主義の革命気運が高まるなか同年4月広州聖三一学校（イギリス聖公会）で学生のストライキが起きる。これを機に以前から燻っていたミッションスクールの教育権を回収する運動が始まり、反基運動が再開した。

その嚆矢は上海での「非キリスト教同盟」（1924年8月）の再結成であった。この同盟には多くの国民党員が参加した。そのなかには李春蕃（柯柏年こと）、張秋人、施復亮（施存統）、高爾柏、唐公霽、楊賢江のような国民党に加入した共産党員のほか、呉稚暉（1865-1953年）、廖仲愷（1877-1925年）、汪兆銘など国民党重鎮もいた。そのうちアナーキストとしても有名な呉稚暉は同盟発起人の一人で、同盟の規約の起草を担当しただけでなく、同盟の反キリスト教キャンペーンの計画の制定にも参与し、「強弩之末的基督教（強弩の末のキリスト教）」（『覚悟』、1924年8月19日）という影響力のある反キリスト教文章をも発表した。そして運動はクリスマスの日の前後、つまり12月22日から27日にかけて行われた「反キリスト教週間」キャンペーンによってピークに達する。この活動は国共両党の組織的なネットワークを通じて上海、広州、南京、杭州、蘇州、紹興、寧波、九江、長沙、濟南、青島、太原、香港などの大きな都市で一斉に行われ、各地で反キリスト教的内容が書かれたビラを撒いたり、講演を行ったり、礼拝堂に突入してキリスト教徒の礼拝儀式を破壊したりする反対運動が行われた。

とりわけ、広州で行われた「反キリスト教週間」キャンペーンの激しさは外国人を驚かせ、これを国民党の政策ではないかと疑う声が上がった。これに対して孫文の命令で1925年1月8日に広東に戻った孫文の長男孫科(1891-1973年)は、ライター記者の質問に「国民党の急進派は近頃反キリスト教の運動を行っているが、しかし父はこのことを聞かされていない」「もし外国人を排斥しているなら、それは無意識的なものである」<sup>(10)</sup>と答えた。その後、孫科は翌2月2日に孫文を看病するため広州の党部から派遣された鄒魯(1885-1954年)、何香凝(1879-1972年、廖仲愷夫人)、宋子文(1894-1971年、孫文の義弟)ら20数人とともに北京に戻った<sup>(11)</sup>。

それから9日後、2月11日「孫科」と署名された「国民党与基督教」という文章が北京の『京報』に掲載された。この文章は、国民党員の反基運動への参加は黨員個人によるもので国民党の正式な立場を表明するものではない、国民党は「信仰の自由」を尊重する、キリスト教は帝国主義の手先ではないばかりでなく、革命に有益であり、キリスト教と国民党とが協力して強い国家を立てることを願うという内容のものであった<sup>(12)</sup>。

これに対し国民党員張宙(生没年不詳)は、同月18日同じく『京報』に「読『国民党与基督教』後致孫科先生」という文章を載せ、孫科の国民党はキリスト教と矛盾しないばかりでなく互いに補完できるという見解に異議を唱え、「国民党の精神は革命的であるが、キリスト教は反革命的であり」、「文化侵略の一つの方式」であり、その害は経済侵略に劣らない、また革命を切実に要求する環境と時代にあるので信仰の自由も制限されねばならない、と反論した<sup>(13)</sup>。張の意見は共産党の主張と合致するところが多い。

また、比較宗教学者でキリスト教に詳しい江紹源(1898-1983年)も孫科の「今回の『反基運動』はきわめて無意識の挙動だ」という発言

を問題視し、詳しく調べずに運動をそう決めつけるのは武断論だと批判した<sup>(14)</sup>。そこにミッション系大学の燕京大学宗教学院教授で、孫科に推薦されて広州市教育局長に任じたことのある簡又文（1896-1978年）が、「討論」に参加して孫科をフォローした<sup>(15)</sup>。彼によると、前掲の文章は「孫科」と署名されているけれども、実は彼によるものではない。孫科が1月に広州に戻ったときに、広州における反基運動の激しさに驚愕しかつ「廖仲愷、鄒魯ら黨員が運動の領袖になっているように見えた」幾人かのキリスト教の背景をもつ黨員たちが、宴席の座で孫科に国民党とキリスト教の関係について質問し、その答えの大意をそのうちの一人がメモをして「国民党与基督教」の題をつけて各新聞社に送ったという<sup>(16)</sup>。雑誌『真光』によるとその投稿者は孫科が1922年広州市長を務めたとき、彼によって社会調査局局長に任ぜられたことのある李応林（1892-1954）だった<sup>(17)</sup>。

この「討論」は反基運動をめぐる国民党内部で大きな亀裂が生じていたことを私たちに教えてくれる。国民党内にはその前身である興中会の中から多くのキリスト教徒がおり、広東軍政府で要職についている孫科、徐謙、甘乃光、張之江、鈕永鍵、伍朝枢らは皆クリスチャンであった。彼らは蔡元培、汪兆銘、吳稚暉、廖仲愷、張宙など非キリスト教徒の黨員と違って、最後まで信仰の自由と「帝国主義への反対＝キリスト教への反対」ではないという立場に立っていた。

このように、党内が反基運動を推進する黨員とそれに反対するキリスト教の背景を持つ黨員に分裂しているなかで、運動に対する孫文の態度は党内の賛成派と反対派の態度に大きな影響を与えた。

孫文の反基運動に対する態度は、1922年秋上海で彼がキリスト教の信仰心の篤い包世傑（1891-1938年）、徐謙（1871-1940年）と交わした談話の中から知ることができる。

私はキリスト教徒である。私の家庭もキリスト教徒の家庭である。私の妻、息子、娘、婿はいずれもキリスト教徒である。私は、私の革命の精神がキリスト教徒から力を得たものが本当に多いと深く信じている。私が革命に従事しているときに、教会がその影響を怖れて、私を除名すると宣言したけれど、それは教会が私を棄てたことであって、私が教会を棄てたのではない。故に道理に合わないのは教会であるが、然し教義が貴くないわけではない。教会は現制度の下で誠に青年を麻醉し、帝国主義者に利用された可能性がある。しかしどのように起って教会を改良して独立自主を謀り、各国の帝国主義の羈絆から脱け出すかは、信者仲間が負うべき責任であり、また一般的に宗教運動に従事する者が急いで立ち上がって為すべきことである。私は政治活動をするため、直接にこの運動に参加することはできない。しかし私も現在の反キリスト教の理論には反対する<sup>(18)</sup>。

孫文の上の話から彼は依然としてキリスト教への信仰心を抱いていたことと、反基運動を良いとはみていないがしかし教会も改良せねばならないという立場であったことがわかる。彼が翌1923年10月21日広州で開かれた全国青年連合会での演説で、余日章らの一部の中国キリスト教指導者たちによって高らかに訴えられていた「人格救国」に共鳴し、その効果を期待したこと<sup>(19)</sup>を勘案すると、孫文のなかでは中国を救う革命とキリスト教とは矛盾せず共存していたのであろう。しかし、教会の改良の必要性からか、それともまだ新文化運動期の宗教に対する研究の雰囲気が残されており、その上その出発点が救国にあったためか、孫文は党員の反対運動を断固として阻止することはなかった。

楊天宏は、孫文のこのような態度は、国民党員がどのような立場でこの段階の反基運動に参加するか、反キリスト教の度合をどのように把握するののかに対してきわめて重要であったと述べる。それはある程度国民党内部の賛成、反対両派の均衡を保つことになり、キリスト教信仰の背景を持っていた党員から見ると、孫文のキリスト教教義およびその精神



に対する賛成の意見から慰めを得ることができたし、一方、キリスト教に反対する党员たちは孫文の教会およびそれと帝国主義についての見解から共鳴するところを探し出して引き続き反対運動を展開することができたという<sup>(20)</sup>。

また、葉仁昌によると、キリスト教問題をめぐる両派の動きが過激でなかった背後には両派の政治的配慮もあった。つまり、孫科など運動に反対する党员たちは、彼ら自身も反帝国主義的な民族主義者であったために、反帝国主義を掲げる運動を厳しく責めたり抑圧したりすることができなかった。一方、呉稚暉ら運動を推進した党员たちも、運動が行き過ぎることを懸念し、また信仰の自由を認めざるをえなかった。そのうえ、反対運動が孫文に対する非難を招くのではないかという心配を抱えていたので、全力で運動を支持することもできなかったという<sup>(21)</sup>。

このように、この段階の国民党による反基運動は、葉仁昌がまとめたように、「国民党が反帝国主義運動を全面的に展開する時にできた一つの支流であり、また多くの党员が何度も国民党の政治資源を利用して反基運動を推進し強化したが、しかしいずれも党员の個人的行動であって、全党の立場と政策を代表したものではなかった」<sup>(22)</sup>。

しかしこのような状況は1925年孫文が死去するにつれてしだいに崩れていき、同運動をめぐる賛否両派の紛糾は孫文の葬儀をめぐって完全に浮き彫りになる。

## Ⅱ 孫文のキリスト教的葬式をめぐる党内部の紛糾 (1925年3月)

1922年6月陳炯明の反乱によって三度広州を追われた孫文は、1923年1月にソ連の援助を受け入れる「孫文・ヨッフエ共同宣言」を発表し、同年広州を奪還するとソ連の要求に応じて国民党改組の準備に着手し



た。そしてソ連によって持ち込まれた共産党との合作の要求を飲んだ。この国共合作は1924年1月に開かれた国民党第1回全国代表大会（1全大会）によって実現し、生まれ変わった国民党は対外的にはすべての不平等条約を廃止し、対内的には全国を統一し憲政を行うことなどを目的とした国民革命を推進した。

当時北方の北京政府は直隸派の勢力下にあった。1924年11月国民革命の目的を実現させるチャンスがやってきた。同年9月孫文の広東軍政府と段祺瑞の安徽派と連合した張作霖の奉天派と直隸派の間で第2次直奉戦争が勃発し、直隸軍の馮玉祥が反旗をひるがえして北京政変を起こしたことによって戦争は奉天派の勝利で終わった。直隸派を北方から追いやった馮玉祥、張作霖、段祺瑞は、北京政府の空白を埋めるために段を臨時執政に当てるとともに孫文の北上を要請した。国民革命の目的を実現するために、北上して国民会議予備会議を開催することを決定した孫文はこの要請を受け入れ11月10日に「北上宣言」を發表、そして上海、神戸を經由して12月4日に天津に到着するが、連日の疲れで病に伏す。12月18日段祺瑞が遣わした許世英から、段祺瑞政府が臨時執政政府としての承認を得るために外国とのすべての不平等条約を承認したことを聞き、孫文は激怒して病状が悪化した。その後、12月31日に北京入りし、ロックフェラー財団が北京に設立した協和医院に入院して治療を受けるも好転せず、3月11日にかの有名な「国事遺囑」<sup>(23)</sup>を残し、翌日鉄獅子胡同の顧惟鈞宅で肝臓癌のため息を引き取った。その後、遺体は永久保存のため協和医院に運ばれ防腐処理がなされ、19日に病院の礼拝堂で「家禱礼」が行われてから中央公園の社稷壇に移された。沿道には約12万人がこれを見送ったという。その後3月24日に国民党による盛大な国葬が行われ、4月2日に靈柩は西山の碧雲寺に安置された。それから中国全土が統一された1929年6月1日に孫文の靈柩は正式に南京の中山陵に祀られることになる。



[図 1] 北京協和医院礼拝堂で行われた葬式の様子

(出典： <http://wemedia.ifeng.com/10728817/wemedia.shtml>. 2017年7月12日閲覧)

ここでいう「家禱礼」がキリスト教式の儀礼である。このキリスト教的な「家禱礼」について、連日孫文の状況を詳しく報道していた国民党系新聞上海の『民国日報』は、3月21日付の記事でただ19日に「午前十時に協和医院で祈祷儀式を行い、それには家族と親友、国民党要人だけ参加する」予定だと報じただけで、同月23日付の記事「孫先生移靈大典紀」ではその様子を報じなかっただけでなく「祈祷儀式」についても一言も触れなかった<sup>(24)</sup>。また、孫中山先生国葬紀念委員会が同年編集した『哀思録』や国民党系の中華革新学社が編集・出版した『孫中山先生榮哀録』も、それぞれ「10時靈柩を病院から大礼堂に移し家禱礼を行った」「11時家禱礼が終わった」と軽く説明するにとどまっている<sup>(25)</sup>。以上から国民党は孫文がキリスト教の葬式を行ったことをあまり公にしたくなかったことがよくわかる。その方針を受け継いだか、台湾で出版された『国父年譜』にも3月19日付の項目には靈柩が中央公園に移されたことしか記載されていない<sup>(26)</sup>。

実際、この儀式をめぐる国民党内部では大きな紛糾が起きていた。中央執行委員であり機密主任秘書として孫文の北上に同行した邵元衝

(1888-1935年)は、3月17日付の日記で19日移霊の日に協和医院の教会堂でキリスト教の祈祷礼を行うことについて、ソ連から派遣された最高顧問ボロージェン (Mikhail Markovich Borodin, 1884-1951年) が孫科に激しく抗議したという<sup>(27)</sup>。包世傑も同日党の内部で「総理はキリスト教徒だからキリスト教的な儀式で納棺すべきだ」との意見と「総理は革命党の領袖だから、革命の意義にもとづくべきで、一宗教に利用されてはいけない」との意見に二分され、若い党员からは「もしどうしてもキリスト教的な儀式で以て納棺するなら、力尽くで制止することも惜しまぬ」と言われたという<sup>(28)</sup>。その後、儀式は汪兆銘や京師警備司令鹿鐘麟 (1884-1966年、馮玉祥配下の西北軍所属) らの調停、説明を経て<sup>(29)</sup>、党の立場を代表しない私的な「家祷式」と位置付けることで行われることとなった<sup>(30)</sup>。これについては北京の『晨报』(研究系)や天津の『大公報』、『天津益世報』(カトリック系)など非国民党系の新聞によって儀式の詳細とともにすみやかに報道された。

これらの報道によると、3月19日式の参加者は孫文の家族と事前に配付した特別参列券をもった親友だけに限られた。燕京大学宗教学院長劉廷芳 (1892-1947年) が司式し、当時北京協和医学院の担当牧師であった朱友漁 (1885-1986年) が補助をした。式はオルガン演奏によるショパンの『行進曲』から始まって、劉による開式の辞(「宣訓」)、協和医学院聖歌隊による讃美歌「求主与我同居 (Abide With Me)」の合唱、祈祷、聖書の朗読、劉による誄詞、讃美歌「耶蘇啊，你是我靈的摯友 (Jesus Lover of my Soul)」の演奏、徐謙による弔辞、孔祥熙 (1880-1967年、孫文の義兄) によるレスポンス、讃美歌「生命美滿之聖言 (Beautiful Words of Life)」の合唱、祈祷、讃美歌「永久的平安 (Peace, Perfect Peace)」の演奏、祝祷の順に進行され、最後に「Coronation」の演奏で終わった<sup>(31)</sup>。この儀式には約200人が参列した<sup>(32)</sup>。

儀式では孫文のキリスト教的な側面が強調され、孫文は革命的なキリ

スト教徒として高く讃えられた。劉は誄詞で、「孫もその家族もキリスト教徒であるためにこのキリスト教的な家禱礼を行う。孫の生涯の功績についていえば、聖書と合致するものが数点ある。1 信仰心、2 希望心、3 博愛であるが、これは聖書のいう『信、望、愛』と完全に同じであり、孫がキリスト教徒であることが十分に証明される」と、述べた<sup>(33)</sup>。弔辞を述べた徐謙も親友の言い伝えと彼と孫が以前交わした話をもとに、孫が真正正銘のキリスト教徒であることを証言したうえに、イエスは革命家である、革命しないものは真のキリスト教徒ではない、「イエスの宣べる天国主義は『世界革命』であり、そのなかには帝国主義への反対、資本主義への反対、抑圧されている民族のために解放を謀ること、そして共産主義を行うことが含まれている」と、かねてからの持論である「キリスト救国主義」を唱え、孫文のなかでは革命と信仰は同じことであったと主張した<sup>(34)</sup>。孔祥熙も、死ぬ前日に孫文が彼に「自分はキリスト教徒で、人間世界に来て罪悪の神と宣戦した」といったことを伝え、孫文は革命家である、イエスも革命家である、と孫文の革命活動を彼のキリスト教信仰に帰する発言をした<sup>(35)</sup>。

その後、世間の誤解を解くために3月27日、宋子文は孫文の家族を代表して声明を出したが、そのなかでも「孫はいまわのときにキリスト教徒として死にたいといったことがあり、また一度ならず政教分離を主張した、孫の家族もキリスト教の信者であり、孫の前言もあるから、党には非キリスト教徒が多いが宗教式の家祭礼を行うことを決議した」<sup>(36)</sup>と儀式は孫文の意思を尊重した決定だと強調しつつ、極力孫文の「キリスト教徒」と「革命家」の二重的役割を釣り合わせようとした<sup>(37)</sup>。

では、この儀式は本当に孫文が要求して行われたのか。この問題に焦点をあてた林輝鋒の研究によると、キリスト教の儀式は孫文みずから要求した可能性は低く、またそれは宋慶齡が後年いったような孫科、孔祥熙が固持したものでもなく、孫科、孔祥熙、宋慶齡らを含む孫文家族全

員のキリスト教信仰にもついた要望によって行われたものだという<sup>(38)</sup>。

筆者は、葬式は孫文の要望ではなかったという林の見解には同意するが、なぜ儀式を行ったかという原因の究明には不十分な点があったと考える。というのは、1958年にエドガー・スノーのかの *Journey to the Beginning* (New York: Random House) が世に出たあと、宋慶齡はのちに自伝の執筆を頼むことになる親友イスラエル・エプシュタイン宛の手紙(1966年)で、孫文がいまわのときにキリスト教の共同墓地に埋めキリスト教会に葬儀を主催してもらいたいといった噂はうそで、「孔祥熙と孫科の二人が、多くの友人たちの話を聞いて」キリスト教的儀礼を挙げることを固持し、「孫文がボルシェビキではないことを証明」しようとしたと述べた<sup>(39)</sup>が、林は「孔祥熙」と「孫科」だけに注目し、宋の述べた「孫文がボルシェビキではないことを証明」するためという理由を見落としているからである。

筆者はこの件については国共合作をめぐる問題も注目すべきであり、それが孫文の家族、とりわけ孫科をしてキリスト教的な儀式の挙行を固持させた要因だと考えている。包世傑の『孫中山先生逝世私記』によると、1924年12月20日、孫文は病中で汪兆銘や孫科らに中央執行委員および広州特別市党部執行委員の名義で、「連ソ・容共」は共産化するためではない旨の声明を出すよう命じた<sup>(40)</sup>。また、同年12月15日広州にいた中央委員胡漢民らも通電を出して孫文は共産を主張するという噂を否認している<sup>(41)</sup>。このことは孫文の「連ソ容共」の政策が世間に認められず、常に不審な目で見られていたことを示してくれよう。

実は国共合作を問題視する声は外部からだけではなく党の内部からもあった。とりわけ、容共政策には改組以前から根強い反対があった。改組直前の1923年11月29日、孫文に指名されて改組準備を進めていた臨時中央執行委員であり国民党広東支部長であった鄧沢如(1869-1934年)は共産党を弾劾し、陳独秀の陰謀を指弾する文書を孫文に提出した。

このことは孫文が抑えたので取り上げることはなかった。しかし、改組後の1924年6月、鄧沢如、張繼、謝持（1876-1939年）ら中央觀察委員はふたたび共産党員が国民党に加入しながら国民党内で党団を維持して秘密活動をし、国民党の主義活動を批判していると弾劾した。その結果、同年7月に国民党は党務宣言を発表して容共原則を明確にし、三民主義を革命の唯一の手段とすることを指し示し、8月の中央執行委員全体会議では「国民党内の共産派の問題」と「国民党と世界革命運動の連絡問題」の二つの決議案の草案が通過された<sup>(42)</sup>。

これらの度重なる弾劾活動のほか、党内では国共合作に反対する結社の動きもあった。広東省財政庁庁長であり、国立広東高等師範校長である鄒魯は、1923年末北京で謝持らとともに「民主主義同志会」を結成した<sup>(43)</sup>。また、同様の立場を取っていた馮自由——彼は一全大会後、50人余りの党員と広州で秘密会議を開いて国共合作の反対を宣伝した——らは一全大会直前の1924年1月7日に北京で「国民党海内外同志衛党同盟会」（一説では「辛亥革命同志俱樂部」という）を結成し、同じころ張繼も「国民党同志駐京辦事処」を結成する。そして1925年孫文の病状が重くなった時期、馮と張の率いる両組織は連合して「国民党同志俱樂部」（3月8日）となる。同年秋には「民主主義同志会」も「国民党同志俱樂部」に合流した。その後張繼ら反共的な中央執行委員は11月23日『民国日報』の総編集であり中央執行委員の葉楚傖（1887-1946年）の提議で、孫文の遺骸が安置されてある北京西山の碧雲寺で共産党員を国民党内から排除する「国民党一期四中全会（中央執行委員会全体会議）」を開催する<sup>(44)</sup>。国民党右派の台頭として有名な「西山会議」である。その主なメンバーが、謝持、葉楚傖、鄧沢如、張繼、鄒魯、林森、邵元衝、呉稚暉、戴季陶、居正ら15人であった。彼らの多くは孫文の最後を看取っていた人物で、そのうち呉稚暉、鄒魯、邵元衝、戴季陶は孫文遺書の署名人でもあった。だから、当時北京には孫科と孔祥熙に「ボ



ルシェビキでないことを証明する」よう勧告できる友人が多くいたのである。

そして孫科も彼らと同様国共合作に反対であったようだ。臨時中央執行委員として国民党の改組準備に参加した彼は、共産党との合作に反対したことで孫文の怒りを買って、一全大会で中央執行委員になれなかった経緯がある。その後も孫科は国民党広州市党部を拠点に反共活動を行い、1924年6月1日には黄季陸と連名で共産党員が国民党党紀を違反したことを摘発し、中央部に共産党を「制裁」するよう要求する提案を提出した。また、孫文の有力な側近で有名な左派の廖仲愷にも共産党員を軽信しないよう勧告している。それだけでなく、孫科は「西山会議派」の影の中心であり、会議には出席しなかったものの、西山会議とその「西山会議派」が上海に設置した本部の経費を全部拠出したのであった<sup>(45)</sup>。このような立場からすれば、孫科にはソ連人最高顧問ボロディンの反対を押し切ってキリスト教的な儀式を敢行する政治的な理由も、また信仰上の理由も十分あったといえよう。そして私的な「家禱礼」に甘んじたのは、党内に非キリスト教徒が多いことと、国民党内で連ソ容共を擁護する勢力が強く、それに孫科自身も容共には反対するもののソ連との連携には賛成だったので、最終的に妥協したのであろう。

この儀式は後述するように国民党員の反基運動への参加を止めることはできなかったが、しかし、これまで孫文に冷たかったキリスト教会は、孫文が死後キリスト教儀式を行ったことによって同運動に対抗する武器を得た。教会知識人による孫文を「革命家イエス」になぞらえる言論の登場がそれである<sup>(46)</sup>。

### Ⅲ 五・三〇事件以後国民党の態度の変化 (1925年5月～1927年7月)

1925年3月孫文死後、広州では4月に公共掲示板に張ってある孫文



を追悼する標語の上に「罪惡の償いはすなわち死に値する（罪惡之償値乃死）」「無罪であれば死を免れる（無罪免死）」と書かれたキリスト教宣伝の張り紙が貼られたことで国民党中央執行委員会や広東反基督教大同盟がキリスト教を批判する出来事があったけれども<sup>(47)</sup>、反帝国主義にもとづく反基運動は再び静まった。もっとも積極的に運動を鼓吹した上海非キリスト教同盟の機関紙『非基督教特刊』（週刊紙、第20期より隔週紙に変更、編集者は李春蕃、上海『民国日報』特殊ページ『覚悟』より刊行された）は、3月25日付の第25期をもって最後としている<sup>(48)</sup>。査時傑の研究によれば、孫文が死後キリスト教的な儀式を行ったことを機に教会が孫を偉大な愛国者でキリスト者と宣伝したことが、反キリスト者をして弁解に苦しませ、このことは多かれ少なかれ反基運動の勢いを弱めたこと、このほか、運動を推し進めた政治団体の間に反対のやり方をめぐって摩擦が起り論争になったことが、運動が再び静まった原因だという<sup>(49)</sup>。

しかし、その静かさも一瞬にして消える。1925年5月30日に上海租界でイギリス警官が中国人デモ隊に発砲して多数の死傷者を出した五・三〇事件が起こると、中国人のナショナリズムは高揚し、これを機に反帝国主義運動が一気に盛んになった。国民党は反英運動として省港ストライキを組織し、6月23日のデモでは広州の沙面租界で英仏警官の発砲に多数の死傷者が出た（「沙基事件」）。こうしたなか、学生の全国的組織である全国学生連合会は同年7月7日に第7回会議を開き、反基運動に関する「全国学生総会議決案」を通過させた。それには引き続き「反キリスト教週間」キャンペーンを行うことと、農村に行きキリスト教の罪惡を暴露すること、教育権回収運動を推進することなどが盛り込まれた。これによって反基運動は再び高まっていくのであるが、その主な活動はやはり学生による「反キリスト教週間」キャンペーンとその報道だった。以下では、広東国民政府——孫文死後、広東軍政府は1925

年7月1日に国民政府として再改組され、ボローディンの支持をうけた汪兆銘が主席になった——の機関紙『広州民国日報』を資料に、1925年と1926年の国民党の反基運動に対する態度をみる。

1925年のクリスマス期間、『広州民国日報』は積極的に反キリスト教の宣伝を行った。それは広東の反キリスト教組織である広東反基督教総同盟の動きを報道するかたわら<sup>(50)</sup>、『反基督教』（半週刊）という特集コラムを開設し、1925年12月3日から1926年2月4日までの2か月間に計13期を掲載した。

広東反基督教総同盟の主な活動は、宣言を発表したり、有名人を招いて講演会を開いたり、また街頭演説や演劇などを利用して反キリスト教を宣伝することであった。その同盟執行委員会第1回会議に、1922年広東の非キリスト教運動を指導した元共産党員で国民党中央執行委員会青年部長陳公博（1892-1946年）が名誉主席としてこれに参加し報告を行った。このことは運動が国民政府の意思を汲んだものであることを暗示している。また、政府主席汪兆銘や周恩来らも12月25日から3日間にかけて開かれた講演会で講演をした<sup>(51)</sup>。

一部の反対運動が警察との騒動にまで発展したこと（黄沙教会事件）をうけて、国民政府は騒乱の再発を防ぐために特別会議を開き、「わが党は宗教問題にたいしてすべて信仰の自由の義を取っているので、今回の反キリスト教の風潮にたいしてもまたこの態度で処しなくてはならない。なので、反対と賛成の両者は自由に討論しそれぞれ意見を発表するに任せる。しかし両方とも妨害や脅迫の行為を行ってはいけない」という声明（12月22日）を出した<sup>(52)</sup>。趙天恩によると、このとき国民政府の実の執権者であったボローディンは、反基運動が外国人の内政への干渉と統一戦線工作破壊の口実となることや国民政府の世界におけるイメージを気にして反対活動の数を減らすことを指示した<sup>(53)</sup>。だから1925年の広東における「反キリスト教週間」キャンペーンは、信仰の

自由に配慮する態度を示しやや控えめ目であったのである。

反キリスト教のキャンペーンがまだ行われているなか、1926年1月国民党第二回全国代表大会が広州で開かれた。この二全大会で反基運動は積極的に議論され、三つの決議案のなかに盛り込まれた。関連箇所を抜粋すると次のとおりである。

#### 「青年運動報告議決案」

[前略] (八) すべての反キリスト教運動は、反帝国主義の観点に立ってミッションスクールの学生と連合すべきである。宗教反対の観点に立ってミッションスクールの学生と分離してはならない。国民政府の勢力範囲内でとりわけ教育権の回収に積極的に取り組むべきである<sup>(54)</sup>。

#### 「党報宣伝計画議決案」

[前略] 本党の党報は帝国主義者の政治経済の侵略を指摘しなければならないだけでなく、とりわけ文化的侵略も指摘し、国民革命を破壊するに足る思想、知識人の隊伍を分裂し、一般革命民衆を麻醉するに足る心理について、本党の党報は格別にこれらの危険を防止しなければならない。この点について、党報は以下のスローガンを宣伝すべきである。[中略] (六) 帝国主義者は千万百万を費やしてキリスト教を伝えている。これは彼らが我々の民族主義の一切を破壊するすごい道具である<sup>(55)</sup>。

#### 「關於農民運動決議案」

[前略] このほか、帝国主義者が農村で田畑や莊園を占拠して教会堂を建設し、また各種ミッションスクールを開設して農民子弟を誘惑している。(これらは一筆者) もっとも頭の簡単な一般農民をして彼らの計略に陥らせ民族観念を失わせる (ものである一筆者)。だから、厳しく取り締らなければならない<sup>(56)</sup>。

これらの反帝国主義にもとづく反キリスト教的内容が国民党二全大会の決議案に盛り込まれたことは、反キリスト教が正式に国民党の政策の一つとなったことを意味する。上記抜粋からは、ミッションスクールの学生に対する態度より宗教の自由を尊重しようという意志が残っていることも読み取れるが、しかしそれは反帝国主義の方針に完全に圧倒されていた。

この国民党二全大会以後も国民党内部では新たに台頭した右派蒋介石や共産党との間に「党務整理案」、「中山艦事件」などの衝突があったが、国民政府は北伐をすることで意見をそろえ、1926年6月蒋介石を総司令とする国民革命軍は北伐を開始した。そして長沙（7月11日）、武漢（10月10日）、南昌（11月8日）、福州（12月9日）などの都市を次々と落とし、勢力を長江流域にまで伸ばした。

1926年の「反キリスト教週間」キャンペーンは、こうした国民革命のさなかで行われた。『広州民国日報』は例年と同じ様に反対活動を報道しその宣伝に努めた。しかし、北伐の只中であったことと国民政府が武漢に移ることに影響されたためか、運動期間は非常に短く、同紙上で確認できるのは12月の16日から31日までである。反キリスト教総同盟は「広州反抗文化侵略大同盟」と改称して反対活動を準備指導し、12月24日の示威大会には総政治部、省青年部、市青年部、中央軍校（もと黄埔軍校）、警官学校および嶺南大学（キリスト教系大学）など212団体が参加し、参加者は数万人に上った。参加者たちはデモ行進をするとともに、①国民政府と広東省政府は最短の時間内に教育権を回収すること、②勢力範囲内で、とりわけ広東域内で不平等条約、とりわけ宣教保護条約を承認しないこと、③封建宗法思想を肅清し革命の新文化を建設すること、などを要求する決議案を通した<sup>(57)</sup>。そのほか、公安局政治部も反キリスト教の宣言を出した<sup>(58)</sup>。

こうした反基運動の担い手は国民革命軍の北伐とともに労働者、農

民に取って代わった。国民政府軍の進軍する先には軍に先立って入った宣伝隊によって労農運動が活発化し、反キリスト教の宣伝は教会堂やミッションスクールの破壊、宣教師やキリスト教徒への抑圧とつながっていった。また、軍隊による教会堂や学校の占拠も少なくなかった。そして北伐軍が1927年3月24日南京を占領する際には宣教師や外国人が殺される事件が発生（「南京事件」）し、この事件が原因で多くの宣教師が上海や日本、ベトナム、極東などに避難して8000人いたといわれる宣教師は500人ほどしか残らなかった<sup>(59)</sup>。この事件はまた大きな外交問題となり、武漢に移っていた国民政府は漢口と九江の租界を回収した革命外交でもってこれを解決しようとした。しかし、英米をはじめとする諸外国は武漢国民政府を相手とせず、蒋介石に事件の解決を要求した。これに労農運動の過激化が革命陣営のなかに深刻な階級対立を生み出したことによって、蒋介石は1927年4月12日にクーデターを起こして共産党を弾圧し、欧米諸国との関係回復を図った。その後武漢でも分共が行われ、対立していた武漢、南京両政府は1928年に合流する。これによって反帝国主義を掲げた反基運動は蒋介石によって停止されることとなり、「宗教を打倒する」というスローガンも1928年には南京国民政府によって正式に撤回される。この撤回をめぐるのは国民党内部では信仰化した三民主義（孫文主義）とキリスト教の対決があったが、これについては別稿で論じたい。

## おわりに

以上、1920年代の反基運動に対する国民党の態度を1925年3月の孫文のキリスト教的葬式を手掛かりに生前と生後に分けて見てきた。

本文であきらかになったように、国民党のキリスト教に対する態度は国民革命（反帝国主義）運動が深化するにつれて過激化していき、五・

三〇運動以前の黨員個人による反対運動から党の方針という昇華を経、最初に反基運動を開始し指導した共産党とともに反基運動の重要な担い手であった。孫文はキリスト教信仰をもつ指導者として存命中は党内のキリスト教への反対派と擁護派の平衡を保たせる存在で、運動が大きくなならないよう牽制する力のある程度発揮していたが、死後に行われたキリスト教的な葬式は反キリスト教的な黨員たちをして反対運動を完全にやめさせることはできなかった<sup>(60)</sup>。その最も大きな要因は国民党が反帝国主義路線を堅持し、全国を統一する国民革命を放棄しなかったことにあるだろう。また、国民党内部では国共合作成立の当初からこの方針に反対する幹部黨員たちが多数いたが、その後も意見の分岐は解消せず孫文死後その葬式にまで影響を及ぼした。孫文のキリスト教的葬式はまさに黨員たちの反共感情に強く押されて行われたものだった。本稿では黨員たちが運動を支持した理由や国民党の党軍の養成校である黄埔軍校の師生によるキリスト教反対運動については触れることができなかった。1928年以後の国民党のキリスト教に対する態度への考察とともに今後の課題にしたい。

## 注

- (1) 拙稿「1920年代中国における反キリスト教運動と中国キリスト教会の本色化」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第48号、2016年2月、265-290頁。「中国の共産主義と反キリスト教運動—1922年の世界キリスト教学生同盟会議の開催への反対」『アジア研究』第62巻第3号、2016年7月、69-85頁。「『非教』と『護教』のせめぎ合い—1922年の広東における『非キリスト教』運動」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第49号、2017年2月、53-80頁。
- (2) 査時傑『民国基督教史論文集』台北：宇宙光出版社、1994年、206頁。
- (3) 葉仁昌『五四以後の反対基督教運動—中国政教關係の解析』台北：久大文化股份有限公司、1992年、90-92頁。

- (4) 楊天宏『基督教与民国知識分子』北京：人民出版社，2005年，263頁。
- (5) 孫文とキリスト教の関係について論じた論文は，武田清子「アジアの革新におけるキリスト教——孫文と宮崎滔天——」（国際基督教大学教育研究所『教育研究』17巻，1974年3月，1-61頁），山根幸夫「孫文とキリスト教」（『史論』第41巻，1988年，1-11頁），深沢秀男「孫文とキリスト教」（*Artes Liberales*，65号，1999年12月，35-47頁）などがある。また，馮自由「孫総理信奉耶蘇教之経過」（馮自由『革命逸史』台北：台湾商務印書館，中華民國42年台1版，10-22頁）や陸丹林「革命党与基督教」（陸丹林『革命史譚』台北：文海出版社，1981年，91-110頁）等，1949年以前国民党員が書き残したものと，スターリング・シーグレイブ著・田畑光永訳『宋家王朝』岩波書店，2010年やLYON SHARMAN, *Sun Yat-sen* (Stanford University Press, 1934) などの伝記もある。
- (6) 羅家倫編・黃季陸増訂『国父年譜』（上冊），中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会，中華民國58年増訂版，22-31頁。
- (7) 日本では「反キリスト教運動」と表記する研究が多い（たとえば，山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社，2006年）が，筆者は1922年の運動は全体的にみて1910年代からの新文化運動における宗教に対する討論の雰囲気はまだ残されており，宗教に対しても比較的寛容であるとみるので，この段階の運動を「非キリスト教」運動と表記している。
- (8) 前掲拙稿「中国の共産主義と反キリスト教運動—1922年の世界キリスト教学生同盟会議の開催への反対」，76-77頁。
- (9) 前掲拙稿「『非教』と『護教』のせめぎ合い—1922年の広東における『非キリスト教』運動」，57-60頁。
- (10) 包世傑「孫中山先生逝世私記」『近代史資料』総71号，北京：中国社会科学出版社，1988年9月，191頁。これは上海市档案馆に所蔵されていた同資料を馬長林，張愛平が整理したものである。
- (11) 包世傑，前掲文，198頁。



- (12) 孫科「国民党与基督教」『京報』1925年2月11日, 第2面, または『真光』第24巻2号, 1925年2月, 43-45頁。邵玉銘編『二十世紀中国基督教問題』台北: 正中書局, 1980年, 381-383頁に収録されている。
- (13) 張宙「読「国民党与基督教」後致孫科先生書」『京報』1925年2月18日, 第2面。または, 邵玉銘, 同上書, 385-387頁。
- (14) 江紹源「給孫科先生的信同他討論基督教与帝国主義的關係」『晨報』1925年2月12日, 第2面。または, 邵玉銘, 同上書, 385頁。
- (15) 簡又文「同江, 張二君討論孫科的文章」『京報副刊』第76-78期, 1925年2月18-20日。または, 邵玉銘, 同上書, 387-398頁。
- (16) 簡又文, 同上文, 『京報副刊』第76期, 1925年2月18日, 第6-7面。または, 邵玉銘, 前掲書, 388頁。
- (17) 「附李応林君來函」『真光』第24巻2号, 1925年2月, 45頁。また, 李の『真光』宛の手紙から, その宴席にはオーストラリアの華僑出身の国民党員で, 1936年から1944年まで国民政府僑務委員会委員に任じていた伍洪(鴻)南もいたことが確認できる。
- (18) 張仕章「中山先生的宗教信仰」『文社月刊』第3巻第5冊, 1928年3月, 88-89頁。また, 陸丹林, 前掲書, 104頁, 郝盛潮編『孫中山集外集』上海: 上海人民出版社, 1994年, 266頁。この文章の初出は包世傑の「請保護教会促進自立条文」(『真道週刊』, 書誌情報不明)であるが, まだ所蔵が確認できていない状況である。
- (19) 孫中山「国民要以人格救国」邵玉銘, 前掲書, 444-452頁。この講演文は「在広州全国青年連合会的演説」(1922年10月21日)という題名で『孫中山全集』第8巻, 315-327頁に所収されている。
- (20) 楊天宏, 前掲書, 261頁。
- (21) 葉仁昌, 前掲書, 91頁。
- (22) 同上, 91-92頁。
- (23) 孫文はこの「国事遺囑」のほか, 妻宋慶齡にあたえる「家事遺囑」と「ソ連

政府あて遺書」を残している。京都大学教授石川禎浩は、「死後の孫文—遺書と記念週」（『東方学報』79号、2006年、1-62頁）という論文で「国事遺囑」と「ソ連政府あて遺書」の作成、署名過程を解明し、「遺教」「記念週」という形でドグマ化、習俗化した「孫文思想」が国民党体制下のイデオロギー硬化へつながっていったことを論じている。当時の国民党内部の政治状況を把握できる。

- (24) 「孫先生遺體移殯予記」『民国日報』1925年3月21日、第3面、および「孫先生移靈大典紀」『民国日報』1925年3月23日、第3面。
- (25) 孫中山先生国葬紀念委員會編『哀思録(第1編)』（沈雲龍編、近代中國史料叢刊、第57輯）、台北：文海出版社、1970年、5頁。中華革新学社編『孫中山先生栄哀録(上)』中華革新学社、1925年、10頁。なお、廣陵書社出版(2011年)の『孫中山先生紀念集』は前掲『哀思録』を復刻したものである。
- (26) 羅家倫編・黄季陸増訂、前掲書、下冊、台北：中国国民党中央委员会党史史料編纂委員會、1969年、1200頁。
- (27) 王仰清・許映湖標注『邵元衝日記』上海：上海人民出版社、1990年、132頁。
- (28) 包世傑、前掲文、217頁。
- (29) 同上。
- (30) 劉廷芳「中華基督徒与孫中山」『生命』第5卷第6期、1925年3月、92頁。
- (31) 「昨日孫中山移柩大典」『天津益世報』1925年3月20日、第3面。「孫文靈柩昨午入公園」『晨報』1925年3月20日、第2面。Y. Y. TSU（朱友漁）, *Ibid.* P.88. LYON SHARMAN, *Sun Yat-sen* (Stanford University Press, 1934), pp.309-310, 武田清子、前掲論文、12、53-54頁。なお、式で演奏された曲名については朱友漁の前掲文を参考にしたが、朱はメンデルスゾーンが「Coronation」を作曲したと書いているが、これは朱の記憶違いと思われる。
- (32) 一説には400人が参加したという（Y. Y. TSU（朱友漁）“The Christian Service At Dr. Sun Yat-sen's Funeral” *The Chinese Recorder* LXII (1931) ,no.2, p.89）。
- (33) 「孫文靈柩昨午入公園」、前掲。

- (34) 徐謙「我對於孫中山先生的信仰為耶穌所傳之真道作証」『真理週刊』第3年第3期, 1925年4月19日, 第1-3面。
- (35) 「時事」『真光』第24卷第4号, 91頁, 1925年4月。
- (36) 「孫中山耶教觀之追記」『申報』1925年3月28日。また、『民国日報』1925年3月28日。
- (37) 林輝鋒「孫中山基督教葬礼問題再探——從宋慶齡与斯諾的一段糾葛談起」『廣東社会科学』2013年第3期, 104頁。
- (38) 同上, 103-104頁。
- (39) イスラエル・エブシュタイン著・久保田博子訳『宋慶齡』(上), 株式会社サイマル出版会, 1995年, 194頁。また, 林輝鋒, 前掲論文, 100頁。呉全衡・杜淑貞編『宋慶齡書信集』北京:人民出版社, 1999年, 652-653頁。
- (40) 包世傑, 前掲文, 186頁。日付がやや早まるものの1925年12月13日付『京報』第2面から汪兆銘の手による「孫中山對於共產主義之声明」という記事を確認できた。
- (41) 中国国民党中央委員会党史委員会編『中国国民党八十年大事年表』中国国民党中央委員会党史委員会, 1974年, 172頁。
- (42) 羅家倫編, 前掲書, 1036-1037, 1096-1101, 1118頁。
- (43) 鄒はその後一大大会で中央執行委員兼青年部長に選出されるが, 大会では容共政策を批判する発言をした。彼は1927年国共合作が破裂するまで反共姿勢を崩さなかった。
- (44) 家近亮子「鄒魯」, 山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会, 1995年, 1232-1233頁。邱錢牧編『中国政党史(1894-1949)』太原:山西人民出版社, 1991年, 502-509頁。
- (45) 孫科の反共活動に関しては, 高華『多变的孫科—歴史学家高華筆下的孫中山之子』(香港中和出版有限公司, 2012年, 14-17頁)と, 後年黄季陸が頼沢涵の「孫科与広州市之近代化(1921-1927)」と題した報告会で行った総括(中華民国資料研究中心『中国現代史專題研究報告』(第8輯), 1978年, 283-284頁)

を参考とした。

- (46) 劉家峰・王森 「『革命的耶蘇』：非基背景下教会人士对孫中山的形象建構」『浙江学刊』2011年第5期，5-14頁。
- (47) 「広州国民党第一区党員大会对基督教之憤恨」『真光雜誌』第24卷第4号，1925年4月，92頁。「中央秘書處致広州市第一区第三区分部函稿（1925年4月1日）」・「中央秘書處致広州市第十区第一区分部函稿（1925年4月11日）」『中国国民党漢口檔案』，「広東反对基督教同盟致總理治葬處等代電（1925年？月2日）」『中国国民党五部檔案』，中国社会科学院近代史研究所所藏。これら檔案資料は立命館大学金丸裕一教授の好意より入手できた。ここに記して謝意を表す。
- (48) 中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊紹介』（第3集），北京：生活・読書・新知三聯書店，1959年，63頁。ただ，散発的ではあるが，心声「給黄埔軍官学校里幾位同学的信」（1925年4月6日）など上海『民国日報』の紙上からはその後もミッションスクールに関する反対言論が確認できる。
- (49) 査時傑，前掲書，194-195頁。
- (50) その題を挙げると以下のとおりである。
- 1925年12月4日「反基督教運動之熱烈」
  - 12月5日「反基督教籌備會致各团体書」
  - 12月11日「反教運動中教徒之分析」
  - 12月17日「反教大同盟成立大会」
  - 12月21日「反教總同盟成立後近訊」
  - 12月24日「広州市之反基督教大運動」
  - 12月25日「反教總同盟緊急通告」
  - 1926年1月8日「反基督教總同盟告全国同胞」
  - 1月12日「閩學生反教遭打擊」
  - 1月15日「基督教士滿布中国」
- (51) 「反教總同盟成立後近訊」『広州民国日報』1925年12月21日，「反教總同盟緊

## 中国国民党と反キリスト教運動

- 急通告』『広州民国日報』1925年12月25日。広東反基督教総同盟の成立過程や活動については稔五「広州市『反基督教運動』的近況及批評」『真光』第25巻第1号、1926年1月、50-64頁からも確認することができる。
- (52) 稔五、同上文、55-56頁。また、「国民党の反基督教運動に対する態度」『広州民国日報』1925年12月17日。この声明が出た後、『広州民国日報』は「反基督教運動平議」(12月21日)と題した反基運動に対する批判文を載せている。韓国の学者閔斗基は、黄沙教会事件は広州の反基運動、ひいては広州国民政府の反基運動政策の一つの転換点になったという(閔斗基「中国国民革命運動와 反基督教運動」, 閔斗基編『中国国民革命運動의 構造分析』서울: 지식산업사, 1990, p.162)。
- (53) 趙天恩編『中共对基督教的政策』台北:中華福音神学院出版社, 1986年, 63頁。また、査時傑, 前掲書, 203頁。
- (54) 「青年運動報告議決案(続)」『広州民国日報』1926年1月28日。
- (55) 「党報宣伝計画議決案(続)」『広州民国日報』1926年1月29日。
- (56) 中国第二歴史档案館編『中国国民党第一, 第二次全国代表大会會議資料(上)』南京:江蘇古籍出版社, 1986年, 368頁。
- (57) 「反文化侵略示威大会詳情」『広州民国日報』1926年12月27日。
- (58) 「公安局政治部為反教告同胞書」『広州民国日報』1926年12月27日。
- (59) 北伐中キリスト教会がうけた被害や南京事件に関しては、佐藤公彦『中国の反外国主義とナショナリズム—アヘン戦争から朝鮮戦争まで—』集広舎, 2015年, 291-327頁に詳しい。
- (60) 一方孫文の北京での死は、彼と彼の思想つまり国民党の影響力を北方に広める役割を果たし、南京国民政府が形式的ながら全国を統一する基礎を作った(家近亮子「孫文の北京における死とその政治効果—中国国民党の北方認識及び政策への影響」『敬愛大学国際研究』第2号, 1998年11月, 143-171頁)。

